意思決定支援
～精神障がい者（突っ走り系）の方の軌道修正～

【　キィワード：　　意思の尊重、コミュニケーション　　】

所属　ＮＰＯ法人風の会　安倍口作業所・グループホーム風　　氏名　　法月聡子

１、事業所の特徴

安倍口作業所は、静岡市葵区の公営団地のすぐそばにあるＮＰＯ法人風の会の就労継続支援Ｂ型事業所です。

また、同法人内でその公営団地の部屋を利用したルームシェア型の共同生活援助（外部サービス利用型）のグループホーム風を運営しております。

事業所の利用者の障がいの内訳は、約８割の方が精神障がい（重複含む）を持ち、残りの２割の方が知的や身体の障がいで、精神障がいの方の割合が多く、入院されていた方が退院後の生活及び就労の場として安倍口作業所及びグループホーム風を利用されているケースが多くあります。

２、事例

精神科病院を退院後、安倍口作業所とグループホーム風を利用し、現在就労継続支援Ａ型事業所に通いながら単身生活をされている一人の元利用者さんの支援に関する事例です。

・Ａさん、58 歳女性、躁うつ病。
・希死念慮の状態悪化で 12 回入退院を繰り返す。
・家族　子供３名、離婚歴あり。
・キーパーソン　妹
　　（Ａさんとの関係は良好）
・歩く事と料理と塗り絵が大好き。
・病院からの情報

診療情報提供書により、成育歴や病歴、現在の状況等の情報。

重点支援内容として服薬管理と保護的環境下での支援が必要。

かなり自分の思いが強く、自己解釈で動いてしまう衝動的突発行動がある。

支援としてはルールを少し細かくして見守っていく必要がある方である。

退院に向け作業所とグループホームの体験を行い、特に大きな問題は見られなかった為、退院し正式にグループホーム風に入所、作業所を利用する事となりました。

退院後は毎日通所されグループホームでも落ち着いて過ごされていましたが、３ヵ月経過したところで懸念されていた衝動的行動が見られました。

① 新聞広告に入っていたＡ型事業所に見学の申し込みをしたとの話が突然ありました。
② 病院仲間の紹介でお見合いをすることになったという話を当日されました。

いずれも事前に職員への相談は無く、本人の思いとしては、①はお金が欲しい、②は結婚したいとの思いから出た行動です（結局②は相手が都合悪くなりキャンセルになりました）。

Ａ型事業所の移行に関しては、作業余利用開始後１年を目途にと考えておりましたが、通常より早いペースではありましたが、3 カ月間の働きぶりの評価を踏まえ本人の意思を尊重し、そちらに移行する事になりました。

そうなると日中Ａさんと顔を会わせることが無くなるので、Ａ型事業所と情報交換を行いながら、ＧＨの方で毎週 30 分ほどご本人と話をする時間を決め体調やメンタル部分の見守り強化をすることにしました。

またＡ型に移る際に単身生活をしたいとの希望もありましたが、就労場所と生活場

所を一度に変えるのは負担が掛かるので順番にやっていこうとご本人と話をし、単身生活をするには貯金も必要だし、仕事も安定させて家族の信用を得る事から、と納得してもらい一年を目標としました。
その間、Ｂ型とＡ型の所得の差額を引越し費用と貯めました。

その後、Ａ型に移行してから半年ほど経った頃、スマホの結婚紹介サイトで彼氏（Ｂさん）が出来たとの話がありました。
すぐにでも結婚したいとの様子でしたが病気のことなどまだ何も相手に伝えていない事と家族の理解が必要なので、真剣にお付き合いしたいなら家族にも伝えるようにとアドバイスしました。
また、今はひとつひとつステップアップしていく事と周囲に認めて貰う実績を作る事が大事なので、まずは今の生活の継続と単身生活への移行を優先して考える事も伝え、Ａさんに承諾していただきました。

Ａ型に移行して８カ月後、貯金もでき単身生活をするための部屋を探して決まりましたが、契約直前に突然Ｂさんの所（沼津）へ行って同棲するとの話があり、急遽妹さんへ事情を伝え、協議を行いました。
妹さんは同棲、遠方で暮らす事、遠方に行くことで働く場や病院が変わる事等、とても不安をお持ちでした。
Ａさんに妹さんから気持ちを伝えて頂いたところ、Ａさんも納得され、沼津へ行く話は無くなりました。
その１ヶ月後、静岡市内のアパートに引っ越しをし、単身生活へ移行、ＮＰＯ法人風の会からの卒業となりました。

３、考察

前述のＡさんの繰り広げた出来事は、ほとんど支援員への事前の相談がありませんでしたが、ご家族、相談支援事業所、ＰＳＷ、訪問看護師、Ａ型事業所、ＧＨが連携し、何かあった場合にすぐ連絡を取り合い、情報共有をし、臨時的、定期的に話し合いの場を設けて結果的にＡさんの納得できるような方向へ軌道修正することができました。
Ａさんと話をする機会を多く持ち、信頼関係作りに努めてきたことが、事前の報告無く行動することは多かったものの、後日報告してくれたり、支援者の気持ちを受け止めてくれるようになった事に繋がったのではないかと考えます。
また、支援者同士の連携がきちんと取れていたことが今回のＡさんに対する支援では重要で、恐らく当法人の支援員だけの力では対応困難でした。

精神障がいの方に多くみられるのが、言葉が巧みだからこそ本質が見えにくい、本当に思っている事が支援者側に図りにくいということです。
今回のＡさんの支援を通してご本人の意思は尊重したい、思いは叶えたい、というのが基本姿勢ですが、ただ闇雲に希望を叶えたり否定するのではなく、個々の障がい特性、その方の性格や特徴も踏まえながら、その意思の尊重のためにはどういう支援が必要（適切）なのか、タイミングも図りながら見極めご本人と調整して行く事が重要だと思います。
そのためにもご本人と支援者との間で普段からのコミュニケーションが必要ですし、関係作りをしっかりしていくべきだと思いました。

４、その後

Ａさんも安倍口作業所を卒業してから２年ほど経ちましたが、今もＡ型事業所に通いながら交際相手とも順調にお付き合いを続けていらっしゃいます。
何かある時には支援者に相談できるようになり、ともすれば突っ走りそうになるご本人の思いを修正しながら、安定した生活をされているようです。
入院時を知るご家族や病院関係者もＡさんの良い意味での変化と現在の安定した生活には驚いている様子です。

タイトル：意思決定支援
～しゃべらない重度知的障害のある人達とのつきあい～

【キィワード：コミュニケーション、自己選択】

所属　ワークショップ　り～ふ　　氏名　森藤明子

１、意思決定支援の前に

障害が重い人達にとって、意思表示するための方法を持っていない（教えられていない）事が多く、周囲から見ると“好ましくない・不適切な”行動として表現していることが度々見られる。り～ふでは“好ましくない・不適切な”行動も、本人達の伝達方法の一つだと捉え、お互いにとって“好ましい方法”へ切り替えることや、周囲の環境を調整する事、新しい伝達方法を獲得する事で、伝わらないもどかしさや生きづらさを少しづつ改善してきた。

２、本人の意思表示に必要な材料

言葉でのコミュニケーションが難しい利用者の意思を確認する時に、必要だと感じたこと

・○×やＹＥＳ・ＮＯの区別と表現方法
・選択行動
・意識して伝達行動の場面設定や機会を増やす
・お互いが理解できるコミュニケーション手段を作る
・コミュニケーションが一方通行にならないように配慮する

３、事例１）

Ａさん　女性　40 代後半　知的障害　ダウン症

自分からの意思表示や要求行動はあまり無い。人との関わりは大好き。水分を摂ったり、トイレへ行く事も指示を待ってしまい、限界まで我慢する。

【支援方法】
・午後の作業がひと段落したら、スタッフへ終わりの報告をする。
・一緒にトイレへ行く
※報告→トイレの流れを作り、指示・誘導や声かけではなく自分で行ける様に支援方法を組み立てる。

事例２）

Ｂさん　男性　40 代後半　知的障害　自閉症

伝達行動は少ないが、理解力や行動力はあるため、度々問題行動につながる。“はい・いいえ”や選択行動がはっきりしていない。本人の意思確認が難しい。

【支援方法】主にｸﾞループホームで行う
・本人の確実に好きなものと、嫌いなものを提示し、○と×をマッチング。
・はっきり伝達できるようになった段階で、好きなものと別の物を提示して選択をしてもらう。

４、日常の積み重ねの先に

「どんな人生を送りたい？」「どこで、どんな生活をしたい？」という実際に経験をした事がない漠然とした質問には、意思表示は難しい。毎日の本人達の小さな意思の積み重ねを理解する事によって、イメージを共有して行く事が増えていく。私達支援者の予想が、本人達の希望する事とさほど違わなかったと思えた時に、本人達と意思疎通ができたと考えている。